

四 三島山遺跡

三島山遺跡は新町集落の北方で、国道二〇一号線の西側に東西にのびる台地上に立地する。この台地上の東西約三〇〇メートル、南北約一〇〇メートルの広い範囲に墓地や集落関係の遺跡が発見されていて三島山遺跡と呼ばれている。その一部が下所田遺跡と上所田遺跡で、かつて緊急調査が実施された。

三島山遺跡では箱式石棺墓や土壙墓などが三〇基以上確認され、石剣・石鏃・黒曜石片が出土している。また、住居跡が存在する可能性もあったが、宅地造成でほぼ消滅したようだ。

下所田遺跡

当遺跡は畑地の開墾によって発見され、原口信行・定村責二の踏査で確認されていたが、破壊が進行していた。このため、昭和二十九年（一九五四）七月に小田富士雄を中心に発掘調査が行われた（小田富士雄・原口信行・定村責二「豊前京都郡・下所田原始墳墓の調査」古文化談叢第19集、九州古文化研究会、一九八八）。調査以前にすでに箱式石棺墓二基と石蓋土壙墓一基が全壊しており、一基の箱式石棺墓（D号）も蓋石が大部分除去されていた。調査の対象となった遺構はこのD号を含めた箱式石棺墓二基と石蓋土壙墓五基である（表2-5）。

D号箱式石棺墓は他の埋葬施設とは方位がやや異なる。蓋・側壁の残存していたすべての石が花崗岩で、一部に粘土目張り

が残っていた。棺の内面には赤色顔料の塗布が著しいが、副葬品はない。棺の全長は一・四三メートルで、成人用の棺と考えられる。

1号石蓋土壙墓は蓋石の一枚が緑色結晶片岩で、他は花崗岩を使用している。棺全長は一・五三メートルで、成人棺である。西側蓋石の直上で、長さ七・八メートル、幅四・五メートルの袋状鉄斧が発見されているが、この埋葬施設に伴うものかどうか不明である。

2号大の箱式石棺墓は西側の小口に緑色結晶片岩を使用するが他はすべて花崗岩で構築している。床面は東側に比べて西側が高くなっている。棺全長一・五三メートルの成人棺である。

2号小の石蓋土壙墓は2号

表2-5 下所田遺跡埋葬施設一覧表

遺構の符号・番号	遺構の種類	方位	推定頭位	主体部の規模（単位：m）			蓋石枚数	粘土目張り	赤色顔料
				長さ	幅	深さ			
D号	箱式石棺墓	N-72°-E	不明	1.43	0.40	0.50	4	有	有
1号	石蓋土壙墓	S-73°-E	不明	1.53	0.52~0.40	0.27	6	不明	不明
2号大	箱式石棺墓	N-73°-W	W	1.53	0.42~0.30	0.49~0.42	6	不明	不明
2号小	石蓋土壙墓	N-85°-E	E	0.80	0.36~0.15	0.20~0.15	3	不明	不明
3号	石蓋土壙墓	N-79°-W	W	1.60	0.56~0.30	0.36~0.30	7	不明	不明
4号	石蓋土壙墓	N-17°-E	N	1.45	0.52~0.35	0.35	4	不明	有
5号	石蓋土壙墓	N-3°-E	N	1.62	0.50~0.30	0.40~0.35	6	不明	不明

大の箱式石棺墓の北側に接するが、頭位は逆方向を向いている。棺全長は〇・八〇^{メートル}と小さく、小児用の棺である。

3号石蓋土壙墓は蓋石に花崗岩・緑色結晶片岩・灰色の結晶片岩など七枚の石材を使用している。床面は西側が東側に比べて一〇^{センチメートル}高い。棺全長一・六〇^{メートル}の成人棺である。

4号石蓋土壙墓の蓋石は南端の一枚が砂岩であるが、他の三枚は板状の花崗岩である。棺内には赤色顔料の塗布の疑いがある。棺全長は一・四五^{メートル}で、成人棺と考えられる。

5号石蓋土壙墓の蓋石には花崗岩・緑色結晶片岩・灰色結晶片岩など六枚の石材を使用している。床面は相対的に北側が高く中央付近がやや低くなっている。棺全長は最長の一・六二^{メートル}をはかる成人棺である。

当遺跡で発見された2号の大小二つの埋葬施設はその配置からみて被葬者同士が血縁関係の可能性が指摘されている。なお、これらの埋葬施設からは土器が出土していないため遺跡が営まれた詳細な時期は不明である。

上所田遺跡

当遺跡の概要は一九五九年七月に『九州考古学』7・8号に掲載された昭和三十四年度西日本史学会春季大会考古学関係発表要旨の中で、定村責二・渡辺正気らが「福岡県京都郡勝山町上所田の石蓋土壙群」としてまとめられている。その関係部分を以下に引用する。

遺跡は附近水田より比高20米位の小丘の尾根より南斜面にかかる。すで

に昭和二十九年夏、原口信行・小田富士雄両氏と定村が尾根附近の箱式石棺2基、石蓋土壙5基を調査した。今回のものはそのすぐ南斜面で1グループをなしていた。

開墾中の発見で詳細は不明だが、

1基の箱式石棺と5―6基の石蓋土壙。すべて通例の大きさと、主軸は東西、頭位は不明。石蓋土壙

は5―6個の花崗岩の蓋石、箱式石棺も棺身は花崗岩で、蓋石のみ

5―6個の緑泥片岩だったらしい。遺物は、2基の石蓋土壙から各々一面の古鏡が出土したのみ。一つ

は長宜子孫銘の内行花文鏡の破片のみを副葬。他は三角縁の鳥文鏡の部類で完形(径8・2^{センチメートル})であったが、発掘時破さいし、現在手元には3分の1大の小片しかない。

ここに記載された銅鏡はともに後期終末の時期のものと考えられる。内行花文鏡(図2―55・1)は直径一八・五^{センチメートル}前後に復元されるやや大形の舶載鏡片で、中央の紐の周りの四葉座の間に「長」と「孫」の二文字が認められる。三角縁鳥文鏡(同・2)も舶載鏡で、直径八・二^{センチメートル}の小形品である。これらの銅鏡以外にも鉄鏃と鉦が出土している。

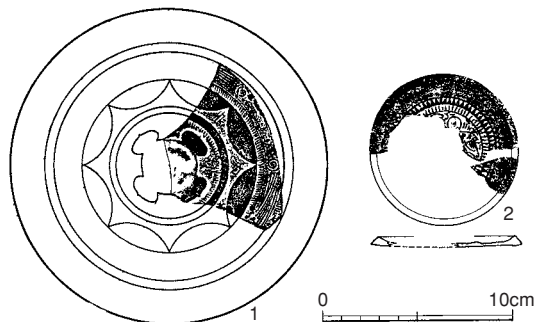


図2—55 上所田遺跡出土銅鏡